

3

プロジェクト型 アートプロジェクトの可能性 郊外地域活性化を主眼として

アートの持つ創造性に着目し、まちづくりや産業活性化を目的として、現在アートプロジェクトが日本各地で行われている。「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」や「瀬戸内国際芸術祭」などはその成功例としてメディアにも数多く取り上げられている。これらは会期を設定し、地域の外から観光客を呼び込む、観光の要素が強い「フェスティバル型」アートプロジェクトである。しかし、この「フェスティバル型」アートプロジェクトは、不特定多数の来場を見越しているため、作品を見る側と作品を提供する側が分断され、芸術表現というよりはイベントとして消費されているのではないかと、という懸念がある。

これに対して、筆者の研究対象である、茨城県取手市で行なわれる取手アートプロジェクトは、「顔の見える」アートプロジェクトを目指し、会期を設定せずに日常的にアーティストと地域住民が協働する活動を行なっている。また、郊外都市の新たな都市モデルを提案することも活動のねらいの一つである。これらの活動を、取手アートプロジェクトは自ら「プロジェクト型」アートプロジェクトと位置づけている。

観光要素を見出しやすい地域で開催する場合や、大規模な予算がある場合は「フェ

3. 研究ノート-7

Writer

赤木 紗菜 AKAGI Sana

博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 2年

スティバル型”アートプロジェクトでも問題ないだろう。

一方で、郊外は新興住宅地であるため他の地域と比べて地縁が弱く、歴史や伝統の根が浅いことに加え、買い物・学業・仕事などの機能は都市に依存している傾向が強く、住むための機能に特化している。ゆえに外から観光客を呼び込むのではなく、そこに住む人々と協働で新たな地域の価値を見出すことを志向した“プロジェクト型”アートプロジェクトが適していると考えられる。取手アートプロジェクトは“顔の見える”アートプロジェクトとして、会期を設定しないアートプロジェクトを展開し、地域住民とアーティストが協働することを重視している。

しかし、初めからそのような形式をとっていたわけではなく、1999年の発足以来、2009年までは公募展とオープンスタジオを隔年で開催していた。2008年に取手井野団地(図)でプロジェクトを行ったこと、主要メンバーの入れ替わり、NPO法人化など、いくつかの転換点があり、2010年から現在のプロジェクト型になった。その取り組みのひとつが「アートのある団地」である。

本研究で参与観察を行なった《SUN SELF HOTEL》は「アートのある団地」の取り組みの一つである。年に二回、団地をホテルとして改装し、宿泊客をもてなす。アーティストや地域住民、取手アートプロ

ジェクトのスタッフらが「ホテルマン」として、食事の献立から部屋の内装まで、宿泊客だけのためにプログラムを考えていく点が大きな特徴である。

参与観察からは、宿泊客にアンケートを取ったり、宿泊客を1組から2組に増やしたりと、回を追うごとに工夫が生まれ、ホテルマンたちの役割が変化していき、ホテルマンたちがそれぞれの得意分野を活かして活躍する様子が伺えた。

インタビューによって、“顔の見える”アートプロジェクトを行う事によって、人々の交流は密度と強度が高いものになり、継続して行う事で地域住民にその存在が認知され、プロジェクトが地域に根差しつつあることが確認できた。また、団地は棟間隔や間取りなど建築的な条件によって日常の気配が見えやすくなっている場所であり、住民たちはヨソモノが多く、自分達の伝統を作りたいという気持ちが強いいため、団地はアートプロジェクトを行うために適した場所であることがわかった。

以上を踏まえて本研究では、取手アートプロジェクトの調査を通じて、郊外地域におけるアートプロジェクトの可能性として、人と人とのつながりを生み出すことや、継続していくうちに地域の新しい伝統になっていくことなどが挙げられ、また、団地が日常生活の見えやすい場所であることなどから、その活動の受け皿として適した場所であることを検証した。



図：取手井野団地（筆者撮影）

3

「視覚障害者をつくる 美術鑑賞ワークショップ」に関する研究

先行研究において視覚障害者と晴眼者の対話による鑑賞の意義は、晴眼者が視覚障害者へ作品を説明するための観察と言語化の繰り返しにより得られる気づきの多さや、視覚障害の有無にかかわらず想像力を駆使して共に鑑賞する体験の奥深さなどが挙げられる。

しかし、鑑賞の詳細な記録から考察されたものはなく、十分な検討がなされていない。

そこで本論では、視覚障害者と晴眼者が共に美術鑑賞を行う「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」を研究対象とし、鑑賞記録の分析から意義をより具体的に明らかにすることを目的とした。

対象としたワークショップは、スタッ

3. 研究ノート-8

Writer

村上 綾 MURAKAMI Aya

博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 2年

フ(2名)と参加者(4~7名)のグループで行われる。スタッフのうち1名は晴眼者でサポートスタッフと、もう1名は視覚障害者でナビゲーターと呼ばれている。ナビゲーターが中心となり、それぞれの見方を引き出しながら鑑賞する。本論では、作品がどのようなものか言葉で説明することを「作品の形容」と表現し、参加者とスタッフを合わせて「鑑賞者」と表す。観察した事例は、いずれも2014年に行われ、川口市立アートギャラリー・アトリア、東京国立近代美術館、横浜美術館を開催地としたものを取り上げる。以下、それらの事例考察から総合的に述べる。

まず、スタッフは鑑賞者の意見を聞き出し、作品から受け取る情報と印象を論理的に結びつけるために質問するが、関連づけや方向づけはせず、自身も意見を述べるなど、自然な対話がなされていた。視覚障害のある参加者へ「イメージ浮かんできますか？」という声かけで、視覚障害の有無によって鑑賞するペースに違いないよう配慮し、参加者の気づきに対し慎重に知識を提供することで「自分たちで導き出された見方」を尊重していた。

次に、視覚障害をもつある参加者は、作品の色や人物の雰囲気、気温、アングルなど状況を想像するための質問を多くしていた。作品に表された光景のなかに自分が身を置くように、五感で記憶された感覚を喚起させ、それらを再構築し想像していたと考えられる。

鑑賞者の発言に注目すると、「スス」という筆の運び方についての擬音語や「ざらざらした」という表面の質感に関する擬態語が登場する。前者は筆の動きから筆致を視覚的に想像することも、なめらかに筆を動かす状態を触覚的に想像することもできる。このように、視覚芸術を触感的な表現に置き換えて伝えることで、視覚に障害のある参加者にとっても伝わりやすい表現になると解釈できる。

鑑賞者たちが同じ作品の表面の質感を

それぞれ異なる言葉によって形容した場面もあった。経験的に、ある対象を触って確認する質感と同時にその表面の様子も視覚で知覚し、それらの感覚を指す言葉も覚えていく。参加者は、そのように蓄積された経験と照らし合わせ、視覚で知覚した像を触覚に通じる言葉で伝えているのである。晴眼の参加者は、このような経験知を駆使して作品の様態や印象を伝えていると判断できる。

また、参加者は写真作品の被写体を「ハイチュウ」「するめ」「ヤモリ」など、一度は触った経験のあるものに喩えて表現を工夫し、さらにその造形を生き物の身体の動きになぞらえる。このような工夫によって言葉で表現しやすく、かつ想像しやすくなっていた。

以上のように、鑑賞者は作品を形容し、自身が受ける印象を表現するため、作品の質感をオノマトペで喩えたり、印象を季節で喩えたり、大きさや形を身近なもので喩えた上で身体の動きとして表現するなど、多様な表現を用いることでわかりやすく、視覚障害の有無に関わらず共に鑑賞していたことが明らかとなった。

これらの工夫は、晴眼者が作品を鑑賞した経験を自分の感性と併せて、いかに他者に言葉で伝えるか考える際にも、大きな示唆を与えるだろう。

最後に、本論では視覚障害者にとっての意義については言及できなかった。このことは今後課題としたい。